河西哲英先生　遭難について

昭和２年５月３日、昨夜来の豪雨で、都田川は刻々と増水していました。学校では、児童の安全な下校を考え、午前９時３０分、授業を中止し、教職員が児童に付き添って下校をしました。

河西先生は、安全地帯である北部方面の通学区監督でしたが、特に危険である東部方面の総指揮・応援に出かけました。児童愛に溢れる先生は、ズボンの裾を高くまくり、上着とチョッキを脱ぎ、児童の先頭に立って歩きました。

学校の東方３町、中野区から須部区に渡る県道に差し掛かったころ、道路の低いところは、都田川から溢れた濁水がすごい勢いで北方の田に流れ込み、辺り一面を水浸しにしていました。児童は、引率の教師に守られながら、足下に注意しながら危険箇所を渡っていました。

そのとき、河西先生のすぐ後ろを歩いていた６年生の女の子が、足下を洗う激しい流れに目がくらみ、ふらふらとして、県道北側の田に転落しました。河西先生は、一大事と、直ちに飛び込んで激流と戦い、児童を抱えました。そして、道路に近づこうとしましたが、容易にはできませんでした。そこで、対岸の隔離舎の下に行こうと、恐怖で意識を失いかけている女子児童を左手で支え、流れに従って泳ぎました。

河西先生は、水泳の達人でしたので、必ず救助できるものと信じて、その場にいた一同は、濁水に浮かぶ二つの頭を目で追いました。

１８分間ほど勢いよく進み、対岸へあと少しというところで、急に、河西先生の姿が見えなくなりました。これを見た石埜先生は、直ちに西へ引き返し、川に飛び込みました。河西先生は、潜水も得意だといわれていましたので、児童の帯をつかんで浮かせ、潜って北方へと行かれたのだと考えました。けれど、女子児童は、仰向きになって浮かんでいるだけでした。石埜先生は、「これは変だ。」と思い、女子児童の側までたどり着くと、その帯をつかみ、たぐり寄せ、岸へ向かって泳ぎ、救い上げました。そして、周辺にいた人に女子児童を託し、再度、水中へ飛び込みました。南から泳いできた川部先生とともに、河西先生を探しました。しかし、発見することはできませんでした。

河西先生の急を知ると、校長先生は、直ちにこのことを村長に連絡し、消防組の出動を求めました。そして、職員を指揮し、いかだを作って、麻縄を引いて捜索に努めました。しかし、水は刻々と勢いを増し、風雨は尚止まず時間ばかりが経過しました。校長は、村長と再度相談し、第２部消防組の応援を懇請し、いかだを増やして捜索を続けました。

しばらくして、正午頃、変わり果てた河西先生の姿を発見しました。直ちに隔離舎へ運び、医師や警官の立ち会いのもと、人工呼吸を続けましたが、河西先生が蘇生することはありませんでした。